

本

現在の 国際秩序を理解する、 先駆的な予見書。



復興亜細亜の諸問題
新亜細亜小論
大川周明/中公文庫/1080円

山内昌之

明治大学特任教授・国際関係史

大川周明といえば、東京裁判で東条英機の頭を叩いて精神の異常を疑われた国家主義運動家として知られる。その代表作『復興亜細亜の諸問題』は、まとまったアジア主義の古典であり、『新亜細亜小論』は数篇の論文をまとめた戦争時局論である。前者は、第一次世界大戦後に、革命ヨーロッパと復興アジアの潮流が結びついて、欧米の帝国主義を倒す流れが出現すると説いた。「ボルシェヴィキの東漸政策」は、第一にボルシェヴィキズムそのものの宣伝であり、第二はアジ

アにおけるヨーロッパ資本国家の駆逐である。「第二の目的に於て、ボルシェヴィキとアジアとが、全然相一致することは言うまでもない。共通の敵たる西欧列強と戦うことに於て、両者が握手することには何の不可思議もない。」すなわち大川は、イスラムとソビエトの動向がアジアの将来を決する鍵になると予測したのである。ここから進んで大川は、アジア復興の先鞭をつけた日本にイスラムやソビエトとの提携を勧めて、欧米本位の国際システムを終わらせると

いう野心的な構想を描いたようだ。しかし、日本は提携すべき中国と泥沼の戦争に入っただけでなく、蒋介石を米英と同盟させた結果、勝算のない大戦争に突入したのである。日本とアメリカは、それぞれ太陽と衆星を象徴としており、あたかも「白日と暗夜」の対立を意味するがごとき関係にあると『新亜細亜小論』のなかで断定する。アジアの「唯一の綜合者」は日本であり、「欧羅巴」の「最後の登高者」はアメリカなのだ。こうして大川は、真の世界史とは、東

西両洋の対立・抗争・統一の歴史であり、東西の決戦によって常に向上の一段を登ってきた。日米は、ギリシヤとペルシヤ、カルタゴとローマが戦わねばならなかったように、戦うべき運命にあつたと主張する。それでも、自由を得たインドと、覚醒せる中国と団結することが「大東亜共栄圏」成功の条件だと、あくまでもアジア解放こそ日米戦争の帰結を左右すると語るのだ。

『新亜細亜小論』では、日支事変(日中戦争)の解決と南方への進出が日本の願いであり、日支が協力すればアジア解放の大業も容易に成功すると楽観視した。両国が「亜細亜モンロー主義」を声明すれば、侵略主義のアメリカも、これを承認する以外に方策は見当たらないからだ。「此の千載一遇の大機に於て、何時まで両国は相戦わねばならぬかと、国民総体の憂である」。この指摘自体はまことに正しい。現在の混迷を深める日中関係を理解し、イスラム国による国際秩序への挑戦を正確に把握するうえでも、大川周明の議論は先駆的な問題提起として無視できない内容に溢れている。●